ハインリヒ・ハイネの *Verschiedene*

高　池　久　隆

岡山理科大学教養部

（1991年9月30日　受理）

I

1844年，ハイネの『新詩集』（*Neue Gedichte*）が刊行された。1827年に出た詩集『歌の本』（*Buch der Lieder*）から17年を隔てて，久しぶりに発表された詩集ということになる。本稿が考察の対象とする *Verschiedene*は，この詩集の中で二番目の位置を占める詩群である。この詩群は，特に次の二点において注目に値する。まず第一点は，この詩群に含まれている詩の成立時期に関わる。すなわち，これらの詩の多くは1830年代前半に誕生しているが，この時期は，詩人のパリ移住（1831年）直後であり，ハイネの韻文からの離反ないしは距離[1]ということが言われるまさにその時期にあたる。ともすれば詩を全く書かなかったかのように思われがちな時期に，実は，少なからぬ詩を引き続き創作していたのである。第二点は，発表時の反響にまつわる。1834年『サロン』（*Der Salon*）第一巻において発表された *Verschiedene* は，たちまちのうちに非難の的と化してしまう。それは，まさに四面楚歌と呼ばれるべき状況であった。しかしこのことは，これらの詩が新しい要素を含んでおり，既存の社会……この場合，いわゆる反体制派と目される人々をも含む……に対する挑発に満ちていたことの証左でもある。

本稿の目的は，韻文からの離反を云々されていた時期に成立した *Verschiedene* において，ハイネがいかなる形で詩の革新を行おうとしたのかを考察することにある。

II

*Verschiedene*を論じる場合の有力な方向として，サン＝シモン主義の影響という観点から見るというものがある。[2] そしてその際，必ずといえるほど頻繁に引用されるのが，次の詩である。

セラフィーヌ　Ⅶ

この岩の上に
教会を建てよう
第三の新しい聖書の教会を
悩みはもはや終った

われわれを長い間惑わした
霊肉二元はほろんだ
肉体に対するおろかしい虐待は
ついに終った

暗い海の神の声が聞こえるだろうか
無数の声で神は話しかける
われわれの頭上に輝く
無数の神の光が見えるだろうか

聖なる神，神は光の中にも
闇の中にもいる
神はこの世に存在するもの全てだ
神はわれわれの接吻のなかにもいる[3)]

第一連，マタイによる福音書第16章第18節[4)]を想起させる「この岩の上に教会を建てよう」ではじまるこの詩において言われる「第三の新しい聖書」は，レッシングの影響をも感じさせるが，しかし何よりもやはりサン＝シモン主義の強力な影響を抜きにしては語れない。「霊肉二元はほろんだ」「神はこの世に存在するもの全てだ」など，この詩はまさに，サン＝シモン主義への信仰告白のごとき内容となっている。ハイネとサン＝シモン主義の関係について見るならば，1830年から31年にかけて，渡仏前のハイネがサン＝シモン主義者 Amand Bazard の書物を読んでいたことが確認されており，渡仏後はこの主義の中心人物 Michel Chevalier らと直接の交流を行っている。[5)] その影響は，何よりもまず『ロマン派』(*Die Romantische Schule*)や『ドイツにおける宗教と哲学の歴史によせて』(*Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland*)などの理論的散文のなかに見られる。精神(Geist)を賛美するために肉(Leib)を滅ぼしてしまいたいと考える心霊主義(Spiritualismus)と，このような精神の横暴に対して肉の権利の返還を要求する感覚主義(Sensualismus)という把え方，そして汎神論(Pantheismus)についての体系的理解は，サン＝シモン主義との出会い抜きには困難であったろう。「セラフィーヌⅦ」は，それを詩という形であらわしたものと言える。

勿論，サン＝シモン主義の影響は，このように直接的な信仰告白的詩句にのみ現われているのではない。次に，「カタリーナⅦ」を見てみることにしよう。

つい最近僕は夢を見た
天国を散歩している夢だ
君と二人で……というのも君なしでは
天国が地獄と化してしまうからね

そこで　選び抜かれた人々に会った
正義の人たちと敬虔な人たち

みんな　魂の救済のために
この世で肉体を苦しめた人たちだ

教父たち　使徒たち
隠者たち　カプチン会修道士たち
変わった老人たち　いくらかの若者……
若者たちは一層醜い格好だった！

細長い敬虔な顔
幅広いはげ　灰色のひげ
（中にはさまざまなユダヤ人もいた）……
そういった人たちが厳格な雰囲気で僕らのそばを通りすぎた

君の方に視線をやることもなかった
わがうるわしの恋人よ
君がいちゃいちゃと僕の腕にしがみつき
いちゃつき　ほほえみ　媚態を示しているというのに！

ただ一人だけ君をみた者がいた
それはこの群れの中で
唯一の美男子だった
彼の顔は驚くほどすばらしかった

口もとには人間らしい善意
眼には神のような落ち着きを示し
かつてマグダラのマリアを見たように
君を見おろしていた

ああ　彼が好意からしていることはわかる
彼ほど純粋で気高い人はいない……
でも僕は　僕はそれでも
嫉妬にかられたような心地になった

そこで白状せざるを得ない
僕には天国が居心地悪く思えてきたと……
神よ我を許したまえ！
私には救世主イエス・キリストの存在が気になるのです[6)]

この詩においては，ハイネ得意の夢のモチーフを媒介として天国が描かれる。超越神論をその拠り所とする既成宗派にとって，天国は幸せの国でなければならない。この詩においては，最終連の「居心地悪く思えてきた」という表現を除けば，天国に対する直接的な批判の言葉はみられない。しかし，彼岸での幸せを願って此岸で肉体を苦しめた人々の誰もが，夢の中の天国においては，決して晴れやかでなく，醜い格好をした存在として描かれることによって，超越神と結びついた天国観が大幅な修正を余儀なくされる。

III

ところで，上で見た二つの詩においては，確かにサン＝シモン主義的世界観に基づくキリスト教批判が明瞭に見てとれるが，その様な詩は，*Verschiedene* 全体から見るならば，ごく一部に過ぎないのである。むしろ大多数の詩は，そういった思想的背景は持ちながらも，広い意味で恋愛詩の系譜に連なるものであり，*Verschiedene* はまず第一にそのような観点にたって検討されねばならない。すなわち，ハイネは *Verschiedene* において恋愛詩をどのように変容させていったのか，あるいは，変容させようとしたのか，が問われなければならない。

そのような観点から，三つの詩を続けて見ていこう。

オルタンス　I

むかし私は信じていた
女から受ける接吻も女に返す接吻も
すべては運命の定めるところによって
すでに太古の時代からあらかじめ決められているのだと

それ故そのころは
本気で接吻を受け　接吻を返したものだ
あたかも　避けられない行為は
せざるを得ないとでも言うかのように

いまでは　接吻も幾多のものと同じ
余分なものだとわかった
それで前より気軽に接吻をする
信仰心もなく　ありあまるほどに[7]

接吻は，旧来の恋愛詩において，恋人同士の精神的結びつきを象徴する厳粛な行為として神聖視，特別視されてきた。そのような解釈が容赦なく打ち砕かれる。

つぎに，「ディアーナ I」を見よう。

巨大な女性の
この美しい四肢が
いま　あらがいもせず
私の望むままに任されている

でもかりに情欲にかられて
めったやたらに飛びかかったら
そんな行為を悔やむことになったろう！
いや彼女に殴られたことだろう

何という胸　首　そして喉だ！

（それより上の方はよく見えない）
この女にわが身をゆだねる前に
神にわが魂をゆだねよう[8)]

ここでは，娼婦とおぼしき女性が登場する。*Verschiedene* にはそれらしき女性が多数登場するが，パリ移住後のハイネがその地の売春地区をしばしば徘徊していたこと，あるいは，娼婦に対してかなり強い関心をいだいていたことについては，いくつもの証言が残されている。[9)] 実体験，観察，そしてそれらから得られたインスピレーションがこれらの詩を産み出したのである。上に掲げた詩においては，魂と切り離された肉体の愛が描かれているが，当時の市民社会の基準に照らして，詩において描くことが許されている限度を明らかに越えた部分まで包まず描写されていると言えるだろう。

以上二例の場合，多かれ少なかれ背景にサン＝シモン主義の匂いが感じられるが，次の例は趣を異にしている。

エマ　VI

いとわしい陰をともなって　はやくも
邪悪な夜が忍び寄る
われわれの心は疲れ
お互いに見つめあってあくびをする

おまえも老いたし　私はもっと老いた
われわれの春は咲き終った
おまえも冷たくなったし　私はもっと冷たくなった
冬が近づくにつれて

ああ　終わりとはかくも物悲しいものか！
快い愛の苦しみのあと
愛のない苦しみがやってくる
生のあとには死がやってくる[10)]

1829年，詩人がまだドイツにいた時期に作られたものと思われるこの詩においては，出会い，そして結ばれた当初は恋に燃えていたであろう二人の，年月を経，老いてからの有様が描かれている。通例，片思いや，恋人との死別など，恋ゆえの悩み・苦しみが恋愛詩の中心テーマである。しかしこの詩では，現実生活において，そのような悩み・苦しみよりも，ある意味でずっとつらく深刻であろう悩みが示されている。すなわち，相手は眼の前におり，ともに暮らしてさえいる。にもかかわらず愛がない，という悩みなのである。

Ⅳ

これら三つの詩は，互いに異なった性格を有しながらも，一つの際だった共通点を持っている。それは，従来の恋愛詩に対する明らかな挑発という点である。接吻の唯物的解釈，肉体のみによる愛，愛のない悩み，いずれも愛……少なくとも詩に描かれる愛……に関して従来の社会が暗黙の了解としていたことに対する，あからさまなアンチテーゼである。あるいは，ある意味では，『歌の本』における自らの詩に対するアンチテーゼといってもよいかもしれない。1837年の『ドン＝キホーテ　序』（*Einleitung zum Don Quichotte*）においてハイネは次のように語っている。「前者（＝ハイネ派）はドイツの歌に見られる一面的観念論（Idealismus）に対抗する有益な反作用を生ぜしめた。それは精神を強力な現実へ連れ戻した。そして，私たちの眼につねに抒情詩の形をとったドン＝キホーテ的行為（Donquichotterie）と映じる，かの感傷的ペトラルカ風（Petrarchismus）を根こそぎにした。」[11]勿論この発言自体は直接　*Verschiedene*　を名指したものではない。しかし，*Verschiedene* に収められた詩の成立時期とこの発言の時期からみて，これまで観察してきたような詩が念頭におかれているとみて差し支えないであろう。

ところで，「感傷的ペトラルカ風」とは何を意味しているのであろうか。ペトラルカ（Francesco Petrarca）は14世紀イタリアの詩人である。若い人妻ラウラと出会った詩人の心は，それ以来，彼女に対する報われぬ愛に支配される。この愛の苦悩が詩に託され，その結果生まれたのが『詩集』（*Canzoniere*）である。この詩集によってペトラルカはヨーロッパの恋愛詩の一つの模範となり，その後数世紀にわたって絶大な影響を及ぼすことになる。ハイネ自身，とりわけ『歌の本』時代のハイネは，成就せぬ恋，希望とその実現の間の埋めがたい溝，甘さと苦さの間での揺れなど，「ペトラルカ風」の主要な特徴を共有していた。[12] 1830年代のハイネについて韻文離れということが言われるが，これはある意味で，感傷的性格を強める「ペトラルカ風」からの離反であったとも言えるであろう。そして，*Verschiedene* における幾多の詩は明らかに，「感傷的ペトラルカ風」克服のための一つの試みであった。

Ⅴ

しかしこの試みは，ハイネ非難の大合唱を招来する。[13] ただひとりラウベ（Heinrich Laube）のみがハイネの擁護者という有様であった。当時の市民は，とりわけモラルの問題に敏感であり，場合によっては政治の問題に対する以上であった。これまでタブー視してきたものがあらわにされたのである。非難の際，陣営を問わず最も多く使われた言葉が「みだらな」（frivol）であった。さらにまた，大都市的官能の世界が多数描かれていることは，反仏感情をも刺激する。勿論，パリを名指しにした詩はごくわずかであるが，*Verschiedene* の主要な詩が，パリという世界屈指の大都会を経験することなしには誕生不可能であったろうことも疑いのないところである。

保守的な側からの批判は当然予想されたことであったが，それだけにとどまらず，ハイ

ネに近いグループと思われていた側からもおしなべて攻撃の矢が放たれた。[14]「若いドイツ」の側は，道を誤ったハイネを正道へ連れ戻そうとの立場から批判，また，「青年ヘーゲル派」は美的理想の欠如を批判した。この後者の批判は重要である。ハイネの詩の本質をついているように思われるからである。*Verschiedene* において，感覚主義的な面を強調した愛が提示されるが，これは全面的に肯定されるべきものとして示されているわけではない。行き過ぎた心霊主義に対する反対物として提示されているのであり，それ自体は，不完全性を内包している。しかしながらこれは，ハイネが理想像を提示する能力を欠いていたことに起因するのではなく，むしろ，「分裂した」時代にあって調和の取れた理想像を提示することの不可能性，ないしは欺瞞性をハイネが認識していたことによるのである。まさに *Verschiedene* は，見せかけの調和を拒絶するという基本姿勢の上に成立する恋愛詩なのである。

注

ハインリヒ・ハイネの著作の原典としては原則として下記を用い，注においては例のように略記する。
Heinrich Heine : *Sämtliche Werke.* Düsseldorfer Ausgabe. Hrsg. von Manfred Windfuhr. Hamburg 1973 ff.（第二巻100ページの場合，DHA II S. 100）

1）たとえば『歌の本』第二版の序（1837年　春）にはつぎのようなことばが見られる。「しばらく前から，私のうちにある何かが，韻文という韻文すべてに対してさからうのである。」（DHA I S. 564.）
2）Vgl. Dorf Sternberger : *Heinrich Heine und die Abschaffung der Sünde. Mit einem Nachtrag 1975.* Frankfurt am Main 1976, S. 79—112.
3）DHA II S. 34.
4）「わたしも言っておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。」（『聖書』新共同訳　日本聖書協会 1989）
5）Vgl. DHA II S. 446 f.
6）DHA II S. 69 f.
7）DHA II S. 43.
8）DHA II S. 42.
9）Vgl. DHA II S. 386 f.
10）DHA II S. 52.
11）Heinrich Heine : *Sämtliche Werke.* Hrsg. von Ernst Elster. Leipzig 1887—1890, Bd. VII, S. 316.
12）Vgl. Manfred Windfuhr : *Heine und der Petrarkismus. Zur Konzeption seiner Liebeslyrik.* In : *Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft* 10. Stuttgart 1966, S. 266—285.
13）Vgl. DHA II S. 403—430 ; Jost Hermand : *Erotik im Juste Milieu. Heines»Verschiedene«.* In : Wolfgang Kuttenkeuler (Hrsg.) : *Artistik und Engagement.* Stuttgart 1977, S. 89 ff.
14）ハイネ自身は，1834年3月4日付の母親宛手紙の中で，*Verschiedene* に関連して次のように語っている。「卑猥な話が多いのですが，これは政治的意図によるものでした。ぼくは，世論にある変化を起こさせたいと思ったのです。ぼくは，まじめすぎる祖国の救い手とみなされるよりは，街の悪童だと言われる方が良いのです。」Heinrich Heine : *Werke, Briefwechsel, Lebenszeugnisse.* Säkularausgabe. Hrsg. von den Nationalen Forschungs-und Gedenkstätten der klassischen deutschen Literatur in Weimar und dem Centre National de la Recherche Scientifique in Paris. Berlin und Paris 1970 ff, Bd. 21, S. 80.

Heinrich Heines *Verschiedene*

Hisataka TAKAIKE
Faculty of Liberal Arts and Science
Okayama University of Science
Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan
(Received September 30, 1991)

Dieser Aufsatz beabsichtigt zu klären, wie der Dichter im Gedichtzyklus *Verschiedene* die Liebesdichtung reformiert hat. Zwar steht dieser Zyklus unverkennbar unter dem saint-simonistischen Einfluß. Aber die meisten Gedichte in diesem Zyklus müssen vor allem als Liebesdichtung betrachtet werden.

Der Zyklus *Verschiedene*……eine Reaktion gegen den „sentimentalen Petrarchismus"……wurde von allen Seiten angegriffen, besonders weil die darin behandelten Themen eine Art Tabu der damaligen bürgerlichen Gesellschaft zu brechen schienen. Heine wollte die traditionelle scheinbare Harmonie zerstören.